

2020年7月豪雨災害

支援活動報告

熊本県の県南を流れる清流「球磨川」※写真は今回の水害以前のもの。

2020年7月4日豪雨により水害が発生。流域に甚大な被害があった。写真提供：Slapstick-Photo | 濱田 喜幸

令和2年7月豪雨では、熊本県を中心に大きな被害が出ました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。特に、熊本県の球磨川流域においては至るところで堤防が決壊し、甚大な被害となりました。まだまだ復興は遠い状況ではありますが、当法人でも中長期に渡り、できる支援を続けていこうと思っています。

支援に入った地域

今回、認定NPO法人NEXTEPでは、皆様から頂いたご寄付により、7/12～9/27までの期間に22回、のべ105名のスタッフ等で水害の復興支援を行いました。

芦北町	7回	相良村	1回
人吉市	6回	小国町	1回
球磨村	3回	菊池市	1回
坂本町	2回	大牟田市	1回

スタッフレポート



7月12日 阿蘇郡小国町

豪雨災害で被害にあわれた阿蘇郡小国町の杖立温泉『米屋別荘』にて、泥かき作業のお手伝いをさせていただきました。

米屋別荘さんは、杖立川に隣接して建っており、当日はまだ雨が降っていたこともあって、川の水は濁流し、流れ込んできた大量の泥で、旅館の元の姿は想像できないほどでした。旅館入口と露天風呂の泥かきをしましたが、温泉内の泥に足が浸かると、底がないのではと思うほど、大量の泥で埋め尽くされていました。水を含む泥の重さは想像以上。絶えることなく出続ける温泉の湯気に暑さを感じながら、終わりの見えない作業に気が遠くもなりましたが、旅館のオーナーさんのお気遣いの言葉や、ボランティアさん方との作業の息が

合うようになると、不思議と困難感や不安感などはなくなりました。「ボランティアは自己完結で」という前提のもとでの活動でしたが、お昼には地域の方々のおいしい炊き出しもいただいしまい、逆に力をいただくことになりました。

多くの方との泥かき・バケツリレーの甲斐があり、夕方には露天風呂の泥はほとんどかき出されました。温泉の元の姿が見えるようになると、達成感やその場の方々との連帯感なども生まれ、少し会話をさせていただいたりもしました。

お手伝いは微力でしたが、多くの方と作業ができたこと、素敵な縁をいただき、参加させていただいたことに感謝しております。まだまだ大変な状況が続きますが、一日でも早く日常が戻ることを願いつつ、また自分にできることを続けたいと思います。



7月19日 人吉市内

私は今回の豪雨で球磨川の氾濫による被害が大きかった人吉市内へボランティアへ行かせていただきました。人吉市内へ進むにつれ、道路脇に積み上げられた家財道具や横転している車、窓も割れて向こう側が見える住宅、潰れた農業用ハウス等が見えてきました。私を知っている人吉市内ののどかな風景とは異なり、言葉も出ませんでした。集合場所の青井阿蘇神社の前にある、蓮池にかけられた橋の朱色の手すりも崩れて、池には逆さまになった車もそのままでした。

今回は球磨川のすぐそばのお宅の泥だし作業のお手伝いをしました。庭いっぱいにも積もった泥はとても重くて、沢山の植木にも土砂がかりそれが乾いて土埃もすごかったです。70代半ばのご夫婦のお宅で、1階は駐車場のようスペースでしたが、2階の冷蔵庫くらいの高さまで水がきたとお話でした。お母さんは昨年ご病氣もされたので無理はできないと言われていましたが、「何日もほとんど寝れてないけど大丈夫よ」「膝も痛かったのに、今は全然平気、膝もがんばらなんって思ってるのかな」と笑いながら話してくださいました。お父さんも「もう笑うしかない」と、一所懸命掃除をしていました。

毎日毎日、ゴールの見えない片づけと、事業を頑張られていて、その姿を見ていると、私たち動ける人が動かなければ！という想いしかありません。帰り際には「無理はしないでくださいね、休める時にしっかり休んでくださいね」とありきたりな言葉しか出せませんでした。お父さんが「助かりました、ありがとう」と笑顔で見送ってくださいました。

まだまだ長い月日がかかると思いますが、私の時間と体力のある限り、これからも人吉はじめ被害を受けた地域のお手伝いをさせていただきたいと強く思いました。



お手伝いした大賀様宅にて



7月23日 芦北町

7月23日に7月の九州豪雨で被害にあわれた芦北町の個人宅へ泥かき等のお手伝いへ行ってきました。

被害にあわれたご自宅は山の上の方の集落に建っており、その一帯がまだ危険地域となっているため、公共のボランティアを派遣できないと言われたとのことでした。そのため、被災されてから2週間以上たった現在も、家の片づけは全くの手つかずで困っておられたそうです。

ご自宅までの道は細く、ところどころ山の斜面が崩れていたり、道をふさいでいた木などを撤去する重機が入っている箇所もありました。そんな道を通って着いたお家には、当法人以外にも、被災された家人の知り合いのつてをたどってボランティアの方々がたくさん集まっており、作業を開始されていました。

2週間以上も経っていたことと、被災後も時折降っていた雨や猛暑によって、泥水を吸った畳は重く、異臭を放っていました。また、山から流れ込んできた土砂には大小様々な石が混ざっており、人力での泥かきには限界がありました。幸いにもボランティアで集められた人々の中に普段から重機を扱っている会社の皆さんがおられ、人力では難しい場所は後日重機にて作業をされるとのことでした。

昼近くには、家からかき出した泥や畳などで、家の入口がふさがれているような状況でした。それらを一旦、重機で撤去する間に、豪雨当日の状況や崩れた斜面を確認することができました。

当日の深夜、集落の方々には山の方から石が流れてきていることに気づいたそうです。常にはない状況に気づき、集落全体で声を掛け合い、全員で避難したとのことでした。

家の裏手を2mほど上がったところに出ると崩れた斜面が確認できると言われたので行ってみました。山の頂上と思われる位置が崩れており、そこから一気に土砂が流れてきた様子が伺えました。ご自宅からさらに上の方に2軒ほど家が建っており、そこも被災されている様子をはっきりと確認できました。また、土砂に流された車がひっくり返っており、土砂災害の凄まじさを実感せずにはられない光景でした。

このような大変な被害にあわれたにも関わらず、家人は集まったボランティアを常に気遣っておられ、「ありがたい」「手伝ってもらえて嬉しい」とずっと感謝されていたことも印象に残っています。公共のボランティアが来られない場所でしたが、想像していた以上にたくさんのボランティアが集まっており、それらの人たちは、全て家人のこれまでの周囲とのつながりの中から集まった人たちなのだなと考えると、普段から人や地域と繋がっていることの大切さも感じました。

家人であるご夫婦は 70 代とご高齢です。今日がご自宅の再建への第一歩だとすれば、まだまだ先は長く大変な日々が続くことが予想されます。ボランティアに休憩や水分補給を促して下さる中、汗だくになりながら動き回られていた姿が思い出されます。

私たちがボランティアとして出来ることは本当に微々たるものですが、被災された方々が一日でも早く日常を取り戻し、ゆっくりと心身を休めることができるよう、これからも自分に出来ることをこつこつと続けていこうと思います。



集落からは遠い山の山頂から土砂崩れが発生。ミカン畑と民家が被害に。地域の方は避難し無事だった。

8月8日 球磨村神瀬地区

今回の豪雨災害で、私自身は 3 回目の支援活動、梅雨明けして夏本番の暑さが予想された。

これまで 2 回人吉地区の支援に出向き、今回は球磨村神瀬地区。集合場所に向かうにつれて過去 2 回と違う現地の状況が見えてきた。各所で川沿いの道路が崩れ片側通行、かと思えば反対の山側から土砂崩れで道路は半分塞がっている。球磨川沿いを車で走りながら、この大きさの川が氾濫することはイメージ出来なかった。集合場所に向かう車窓から見ていると、まだまだ手付かずと思われる家も多く見られた。

現場に入って歩きながら改めて見てみると住宅、郵便局、商店など 2 階ぐらいの高さまで水位があったと思われる跡が残っていて、住宅街のなかに道は作ってあるが豪雨からおよそ 1 ヶ月経ったとは思えないほど泥だらけだった。泥かきが出来ておらずまだ家の中に入れていないお宅、大きな家財は運び出してあるが小さな家財が泥にまみれたままのお宅、流されて車内にも泥が詰まった車、復旧までもにまだまだ時間が掛かると感じられた。



今回頼まれた現場のひとつ目は 1 階の天井まで泥水に浸かり、今後住む予定はないので家の中を片付けて欲しいとのことだった。大物の家財はすでに撤出してあり、細かなものをとりあえず家の外に出す作業となった。家主さんは避難しており様子を見に来る予定はないとのこと、様々な物が家の中から出てきて要る物なのか不要な物なのか判断がわからないまま作業を進めていった。片付けて良いとは言われていても、少し前までそこは誰かが暮らしていた家。そこから出てくる服や食器、写真、アルバム、雑貨などそれぞれに思い出があるだろうと思いつつ、アルバムなどは返せるように別に分けながら片付けた。

ふたつ目の現場は同じく住居と店舗が浸水し、住居の倉庫の片付けと泥出しの依頼だった。荷物は多くは無かったが、10cm 程度積もった泥を出す作業には苦労した。出しても出しても出てくる泥に、交代しながらの作業を続けどうにか頼まれた部分を片付けて当日の作業は終了した。

一部ずつは片付いていっているが、周りを見れば全く終わりが見えない現場が目に入ってくる。8 年前の阿蘇の水害でも支援をしたが 1 回限りであまり実感のないまま終わっていたように思う。今回改めて水害の恐ろしさを感じた。

出来ることは小さなことかも知れないが、可能な限り支援を続けていきたいと思う。



泥にまみれていた写真アルバムを洗浄し、家主の方に後日お届けすることができた (協力団体：自立支援シェアハウス IPPO、熊本ベテラ協会)

毎回数名～十数名で活動。NEXTEP スタッフとその呼びかけに応じてくださったみなさまと共に





道路が寸断されたため、1カ月以上復旧を進めることすら出来ない地域も多かった。

8月16日 芦北町

令和2年8月16日 日曜日、天気は快晴、予想最高気温 37℃。NEXTEP 災害支援チーム総勢 11 人は今週も出動した。男性 9 人、女性 2 人。盛夏のうえに被害から時間が経つにつれて苛酷になる現場の厳しさを、この男女比は現しているようにも思える。向かうは芦北町海路地区。途中の道が崩落して最近まで通行止めになっていて、仮開通はしたものの重機は入れず手作業での後片付けをしているという事前情報を得て現場に向かった。田浦 IC で南九州道を下りて目的地に近づくにつれ、ひどく崩落した道路や、水に浸かり家財を運び出したと思われる空っぽの家屋が目についた。どのような力が加わったらこんなことが起こるのか、川はそのときどんな状態だったのか。うまく想像できないほどであった。

今回のお宅で一番にお願いされたのは、増水した川に流されて使えなくなった木造の小屋を解体すること。ところが小屋は敷地の奥の方に流され、その手前には家の中から運び出した家財が山積している。その家財を 100 メートルほど離れた場所まで運ぶことから

作業は始まった。このお宅の住人はヘリで救助されたとのことで、100 メートルの道も絶壁にあり決して簡単ではない。灼熱の太陽を浴びながら、濡れた畳や布団を黙々と運ぶ。一往復したらひと休み。体力自慢の男性陣も口数が減る。休憩時間に、近くを流れる小川に火照った体を冷やしに行くことがリフレッシュであった。4 時間ほどかけて運び出しを終え、ようやく小屋の解体を始めた。丁寧に造り込まれた小屋を見ながら、この小屋を作った方はこのような形で解体することになるろうとは想像もしなかっただろうと心の中で謝りながらの作業となった。網戸を外し、窓を外し、柱を切断する。知恵を出し合いながら、危険のないようひとつひとつ作業を進める。

どれくらい時間がかかったかわからないが、小屋の解体は終了した。私はその時、無事に解体できたことに安心した一方で、ここまで日常を奪ってしまう災害に対してやり場のない気持ちを強く感じた。家主さんは再びこの家に住めるのだろうか。住む選択も住まない選択もどっちにしても簡単にはできないだろうと思った。

私は今回の災害支援に 5 回参加した。初めての経験の中で、被災地で作業することは身体はもちろんのこと心もかなり使うものだと知り、とても貴重な体験ができたと思っている。被災地の話題を新聞やテレビで見ると、支援に行った地域や実際に作業に入ったお宅のことを思い出す日々である。



解体した小屋。元の場所から 10m 程流され道路を塞いでいた。



車両が入れない場所からの家財の運び出し。人手による協力の大切さが感じられた。

収支報告

支援金	43 の団体・個人より	655,007	
支出内訳	支援物資	159,208	マスク、水、虫よけスプレー、懐中電灯など
	作業道具	215,581	高圧洗浄機、スコップ、ブラシなど
	ボランティア保険代	62,720	※ボランティアセンターを経由しない活動については別の保険を利用
	交通費	146,642	ガソリン代、高速代、レンタカー代
	支出計	584,151	
残額	70,856		

協力

◎被災した写真の洗浄、乾燥、綴じなおし作業

- ・自立支援シェアハウス IPPO 様
- ・熊本ベテル協会 様

情報交換・協力

- ◎一般社団法人 熊本支援チーム 様
- ◎青井阿蘇神社 様

その他多数

残金について

発災直後より毎日のように学生たちが現地にボランティア支援に入られていた秀岳館高校様へ、活動資金として 10 万円を寄付させていただきました。(左表の残額 70,856 円及び法人資金を充当) 秀岳館高校様のフェイスブックにて詳しい活動報告がございます。そちらも是非ご覧ください。